JAILA JOURNAL 第 4 号
（2018 年３月）

日本の大学生のための「文章力養成講座」

“Japanese 101” for Japanese college students[1]

上野 輝夫・溝端 剛・半田 結・有田 伸弘
関西福祉大学

Teruo UENO / Takeshi MIZOBATA / Musubi HANDA / Nobuhiro ARITA
Kansai University of Social Welfare

Abstract

By introducing various admission policies and procedures, many colleges in Japan have started to accept students with low levels of basic academic skills. As a result, it is reported that many Japanese college students today do not even read their textbooks, let alone newspapers. Keeping in mind that this might be the case resulting from the students' poor language skills, which are to serve as the foundation for higher education, we, the authors of this paper, started to work on a project for the enhancement of our students' overall Japanese language proficiency. In Spring 2017, we began an extra-curricular program, called *Bunsyoryoku Yosei Koza*. The present paper discusses the possible effects of the program. We compared the average scores of pretest and posttest of 21 students on a standardized Japanese proficiency test. The pretest was given at the 1st week of the program, and the posttest at the 15th week as a final. The Wilcoxon signed-rank test shows that the difference between the average scores on the pretest and posttest is statistically significant, $Z = 2.69$, $p<.01$, $r = .59$. Further, the program participants' results of the 20th *Nihongo Kentei* are reported. Our study suggests that even one-semester program could benefit students. We argue that to provide this type of program, possibly called Japanese 101, is a responsibility of colleges today.

1. 本論文の目的と研究の背景

1.1 本論文の目的

本論文執筆者が勤務する大学では、平成 27 年度後期に、学生の日本語力向上を図るためのプロジェクトチームを結成し、経済、教育、歴史、法学、英語を専門とする教養科目担当教員が日本語力の

[1] 「文章力養成講座」の開講趣旨に鑑み、本講座がアメリカの大学で英語母国語話者を含めた全学部学生に課せられる English 101 に相当すべきものという思いで、“Japanese 101”とした。

向上を目指す方策を検討した。その結果、平成 28 年度前期より、社会福祉学部学生と看護学部学生の希望者を対象とした課外授業としての「文章力養成講座」を開設するに至った。

本論文では、「文章力養成講座」の概略を報告するとともに、講座受講前後での学生の日本語基礎力に変化があったのかを検証する。

1.2 大学生としての日本語基礎力養成の必要性

昨今、入学試験が多様化されたことを背景に様々な基礎学力の学生が大学に入学している。大学教育の基礎となる日本語力もその例外ではなく、小野、村木、林、他(2005)は、「中 1」から「高 3」までの 6 レベルに分類した日本語力のなかで、対象私立大学の 19%の学生が「中 3」レベル以下であると判定している。このような事態は地方の私大に限ったことではなく、石塚（2002）は筑波大学において「CEO」「ATM」など新聞に頻出する外来語の意味を答えられた学生が 120 名中 10 名で、新聞を読む学生が少ないこと、新聞以外についても課題以外の自主的な読書量が少ないと報告している。

いわゆる「ゆとり教育」が終焉した現時点においても、学生の日本語力低下に際立った変化の兆しは出ていない。上村（2016）は、勤務大学の学生の読書量について調査し、69%の学生が小説を、また 67%が新聞を「全く読まない・あまり読まない」と報告している。さらに、教科書・テキストについては、75%が「全く読まない・あまり読まない」としている。ただし、読書への興味は 80%の学生が持っていることも併せて報告している。つまり、読書はしてみたいと思うものの、実際の読書量は増えていない訳である。これが、読書を楽しむために必要な日本語力が不足しているためだとしたら、思考しながら新たな知識を得るために精読が必要とされる教科書・テキスト類を読もうとしない学生が多く存在することも容易に理解できる。その結果、仲正(2016）が指摘するように、かなり的を絞りピンポイントで出題した試験問題に対しても、問われていないことを答えようとする学生が多くいるという事態に陥ることになる。このような現状は、現役の大学教員であれば多くが経験していることであろう。だからこそ、以下の２件の投稿に見られるように、自らの日本語力の不足を認識し、インターネット上に具体的な解決法はないかと救いを求める学生も出てくるわけである。

≪投稿１≫「国語力のない大学生です」(2016)。

MARCH（筆者注：首都圏の 5 大学、明治、青山学院、＝立教、中央、法政の頭文字）にスポ選で入学した大学一年生です。中学生時代から勉強はできないほうではありませんでしたが、何の目標もなく高校、大学と受験勉強を経ないままスポ選で大学生になってしまいました。田舎の低偏差値高出身で、基本的な世界史や日本史の知識もなく、国語の力も鍛えたことがありません。今まではレポート等、長い文章を書くことなく大学生活を送ってきましたが、語彙や短い文章、中学生レベルの文章も書くのにも苦労するレベルです。この文章もまともにかけているでしょうか・・・？先のことを考えると真剣に勉強しないとまずいと感じています。春休みに時間があるので何かしたいのですが今までその場しのぎの勉強しかしてこなかったので何をどうしていいのやら見当がつきません。世界史などは教科書を読んだりしていますが大丈夫でしょうか？国語力を中心に基礎学力を上げたいのですがどうしたらいいでしょうか？お恥ずかしい質問ですが、回答お願いします。

≪投稿２≫「今、大学生なんですけど国語の能力は中学生並みです」(2013)。

漢字だけは出来ますが、語彙力、読解力がまだまだだと感じます！ことわざや慣用句、四字熟語も嫌いです。 そんな私に早く身につくような勉強法や問題集、参考書などあれば教えて下さい！

これらの投稿には、苦手だから仕方がないと諦めることなく、何とか国語力をつけようともがく学生の姿がうかがえる。読書量の低下とあいまった学生の日本語力の低下は、大学における講義のテキストや論文の読解、レポート・論文類の作成に大きな支障が出てくることは自明である。大学で教鞭をとる者は、自らの専門分野にとらわれることなく、このような学生の実態を正視し、その悩みに応えるべく努力をする必要がある。

このことは、文系の学生に限ったことではなく、理工学など理系の学生に対しても当てはまることである。「『国語力』を磨けば､日本の理系は世界で勝てる」というNASAジェット推進研究所の小野(2013)や、「研究や勉強ができないのは国語力不足が原因！？」(2013)という京都大学研究者など科学技術系の教育・研究者による学生の日本語力向上の重要性への言及は注目に値する。教科書や論文を読解するだけでなく、自らの思考、アイデアを表現するための重要な要素としての日本語力が問われているわけである。ここに、大学生にふさわしい日本語力を養成する必要性が出てくる所以がある。

1.3 各大学の取り組み

このような現実の中で、各大学は初年次教育、リメディアル教育と称して、あるいは、「日本語表現」など教養科目として、それぞれ独自のプログラムにより学生の日本語力の養成に努めている。小倉、谷口、中嶋、永井（2016）のように、独自の初年度教育テキストを作成する試みもあれば、また、日本語検定試験や日本漢字能力検定試験対策を通して、学生の日本語力の向上を目指す試みもある(野々村、2008, 2011)、(西尾、矢島、鈴木、他: 2016)。しかし、近年、学生が各受講科目を深く学習できるように各大学とも受講単位数に上限を設けるようになった。このため、日本語力向上のための新たな科目を開講することが困難になっているのも事実である。田中、近森、徳永、他(2009)は、この現状に対処するための立命館大学における既存科目の中での「国語力育成プログラム」の開発の試みを報告している。また、正規の科目以外で就職支援の一環としてキャリア開発を担当する部門がその一端を担うこともある。このように、日本語力養成のための取り組みや効果についての講座担当者による研究、実践報告が散見されるようになったが、対策を効果のあるものにするには、他大学の方策をそのまま模倣するのではなく、各大学・学部がそのカリキュラムや学生の基礎学力の実情、また人的資源など諸条件を考慮して対策をとる必要がある。

特に、福祉、看護、教育など実学を教授する本論文著者の勤務大学においては、学生は、就職に直結する各種国家試験や教職採用試験等の合格を目指して効果的に学習する必要がある。しかし、上述したような全国の大学生の現状を鑑みるに、そもそも受験のための学習書を正確に読みこなすことができるのだろうかという危惧さえ生じてくる。このような背景で生まれたのが「文章力養成講座」であるが、次章以降、その概要と効果について論じることにする。

2. 「文章力養成講座」の目標と概要

2.1 「文章力養成講座」の目標

そもそも一口に日本語力養成と言っても、何をもって「日本語力」とするかについては議論のある

ところである。当プロジェクトチーム内でも大学教育を受けるのに必要とされる日本語基礎力について議論を重ねたが、前述 1.2 で触れた現状を考慮すると、第一に、テキスト類を根気よく読み理解しようとする学習習慣をつけることであるということで意見の一致を見た。読解力の養成と称して所謂国語の読解力試験の類のものを解説しても、自ら進んで新聞や書籍を読むことにはつながりにくいのではないか。むしろ、自ら進んで読書するようになるには、社会で起こっている事象や諸問題に関心を持ち、その話題が面白いと感じる必要がある。ある話題に興味・関心が湧くかどうかは、人それぞれが持つ社会現象に対する知識（すなわち「教養」）が大きな意味を持つ。このため、本論では学校教育での「国語」の授業との混同を避け、「国語力」とせず「日本語力」と記述してきたわけである。ただし、新講座名を「日本語力養成講座」とすると、外国人向けの日本語講座と誤解される恐れがあるため、幅広い教養を身に付けながら臆せず文章の読解にあたり、かつ表現力も養成するという意味で「文章力養成講座」とした。そして、「文章力養成講座」の目標を以下のように設定した。

(1)大学教育に必要な日本語基礎力を身につける。

(2)大学生としての学習習慣を身につける。

(3)社会で生起している諸問題（ニュース）に関心を持つようになる。

(4)幅広い教養を身につける。

(5)日本語検定により客観的な日本語力をはかる（まず３級、次に２級合格を目指す）。

(1)～(4)については、個々独立した目標ではなく、４つが共起しながら日本語力の養成につながるものである。ただし、その効果は客観的な尺度で測定されなければならない。日本語力・国語力の客観的尺度としては、特定非営利活動法人・日本語検定委員会による「日本語検定」、朝日新聞とベネッセによる「語彙・読解力検定」、日本漢字能力検定協会による「日本漢字能力検定」や「文章読解・作成能力検定」、あるいは、時事問題への関心・知識を問う日本ニュース検定協会による「ニュース時事能力検定試験」などがある。どれを尺度として採用するかは、どのような力を養成しようとするのかという講座の目的によって異なってくる。戸田（2016）は、2015 年度に実施された 2016 年度教員採用試験の一般教養・国語で出題された問題を分析し、文章読解や鑑賞といった国語に関する専門的知識を問う問題より、「漢字」（読み書き・四字熟語など）、「ことば」（ことわざ・慣用句・敬語など）といった日本語に関する知識を問う問題が多く出題されているとしている。日本語検定委員会の「日本語検定」は、「敬語」「文法」「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」「総合問題」という 7 つの領域から日本語力を測定するようデザインされており、学生の総合的な日本語運用能力を測定する尺度としては適当と判断し、本講座では、学生にその受検を推奨することにした。

2.2 「文章力養成講座」の概要

平成 28 年度前期の講座は、週 1 回、各クラス 10 名以下の少人数の演習形式で行った。主教材として朝日新聞のインターネット教材「時事ワークシート」を、また副教材として東京書籍『日本語検定 3 級公式練習問題集』を使用した。「時事ワークシート」については、講座担当教員 5 名が毎週の定例会議で、コラム記事「天声人語」から大学生にふさわしいトピックを選び、以下の要領で活用した。

①黙読：「天声人語」（603 字）を黙読し、わからない漢字や言葉をノートに書きだす。

②音読：声に出して読む。

③書写：丁寧にかつ正確に書き写す。

④わき道学習：週替わりのトピックについて担当教員が用意した関連資料に基づき、「天声人語」の奥に開かれた深淵な教養を味う。

⑤要約とタイトルつけ：70 字程に要約し、タイトルをつける。

⑥要約とタイトルの例示と吟味：担当教員の手による要約例と要約に至る道筋、タイトル例を示す。受講生のタイトルを全員で吟味し、最も適切なタイトルを選ぶ。

⑦ノートを提出し、添削を受ける。

さらに、『日本語検定3級公式練習問題集』については、家庭学習させ、毎週、授業の初めの10分程度を使い、予告した範囲の小テストを課した。下の表1は、前期15回の授業内容を示したものである。また、表2は上述④の担当教員作成の「わき道学習」用資料の一例を示したものである。

表1. 平成28年度前期・文章力養成講座授業内容

授業回	テスト類	天声人語
1	Placement Test (日本語検定 3 級過去問)	
2	① 語彙(1)（2015 年版テキストより）	2016/02/25 「デジタルとのつき合い方」
3	② 語彙(2)（2015 年版テキストより）	2015/09/24 「街場の書店は出会いの場」
4	③ 言葉の意味(1)（2015 年版テキストより）	2016/03/07 「命ひしめく春に」
5	④ 言葉の意味(2)（2015 年版テキストより）	2015/09/07 「生きるスイッチ」
6	⑤ 敬語(1)（2016 年版テキストより）	2015/12/21 「立憲か、非立憲か」
7	⑥ 敬語(2)（2016 年版テキストより）	2015/06/12 「文系学部見直しへの疑問」
8	⑦ 漢字(1)（2016 年版テキストより）	2016/04/18 「活断層の非情」
9	⑧ 漢字(2)（2016 年版テキストより）	2015/06/07 「雨の季節の白い花」
10	⑨ 表記(1)（2016 年版テキストより）	2016/05/12「米国大統領に望むこと」
11	⑩ 表記(2)（2016 年版テキストより）	2016/04/27 「特別法廷、最高裁が謝罪」
12	⑪ 文法（2016 年版テキストより）	2016/01/10「ウルトラマン５０年」
13	⑫ 文法（2016 年版テキストより）	2016/05/07 「システム障害という沼」
14	⑬ 総合問題（2016 年版テキストより）	2015/07/06「漢字が「感じ」になる？」
15	Achievement Test (日本語検定 3 級過去問)	

表2. 担当教員作成「わき道学習」資料の例

授業回	天声人語トピック	担当教員作成の資料
9	「雨の季節の白い花」	・天声人語に出てくる白い花の紹介（写真付き） ・二十四節気の説明　・芥川龍之介の「相聞」について
10	「米国大統領に望むこと」	・アメリカの原爆容認論　・オバマ大統領の広島演説（英文、和文）
11	「特別法廷、最高裁が謝罪」	・ハンセン病の向こう側
12	「ウルトラマン 50 年」	・ウルトラマンの正義とは何か？　・アンパンマンの正義とは何か？
13	「システム障害という沼」	・西垣通（著）「コズミック・マインド」のあらすじと書評
14	「漢字が「感じ」になる？」	・キラキラネーム

これらの資料は、「天声人語」を単なる書写や読解、漢字の読み書き練習などの教材としてとらえるのではなく、コラムに提示された話題について、教員、学生共に一緒に楽しみながらもう一歩深く味わってみようという趣旨で生まれたものであり、この部分の授業内容を「わき道学習」と名付けた所以である。このように楽しみながら学ぶという姿勢が、学生の興味・関心を引き出し、さらなる読書へとつながり、ひいては前述の目標(4)に挙げた「幅広い教養を身につける」ことになるのではないかと期待している。このような内容で前期 15 回の授業を展開したわけだが、次章では、その効果について Placement Test と Achievement Test の結果を踏まえて論じることにする。

3. 「文章力養成講座」の効果

3.1 Placement Testと小テスト

新聞コラムの書写や内容の吟味・要約、漢字の練習などから読書をより身近なものにし、社会の諸問題に対しての興味・関心持つ態度を育て、さらに「わき道学習」から一歩深い読書へとつなげ、それが日本語力の向上に寄与するというサイクルが果たしてうまく進んでいるのかということは、客観的な尺度で測定する必要がある。

「文章力養成講座」の効果を測定するためには講座開始時点での学生の日本語力を測定する必要があり、平成 28 年度 4 月の初回の授業に参加した学生 151 名に対して、Placement Test を実施した。内容は、日本語検定 3 級の過去問に倣い同程度の試験とした。結果は、103 点満点で平均点 72.9 点(70.7%)であった。その得点分布を表 3 に示す。

表 3. Placement Test の得点分布表(103 満点, *N*=151)

得点分布	人数
40-49	1
50-59	13
60-69	30
70-79	69
80-89	35
90-103	3

表 4. Placement Test の得点分布表(103 満点, *N*=49)

得点分布	人数
40-49	1
50-59	4
60-69	11
70-79	20
80-89	11
90-103	2

なお、当講座は履修単位とはならない自由講座であったため、このうち実際に受講登録した学生は 50 名であったが、うち 49 名が Placement Test を受験した。受講生のみの Placement Test の結果は表 4 と図 1 に示す通りである。

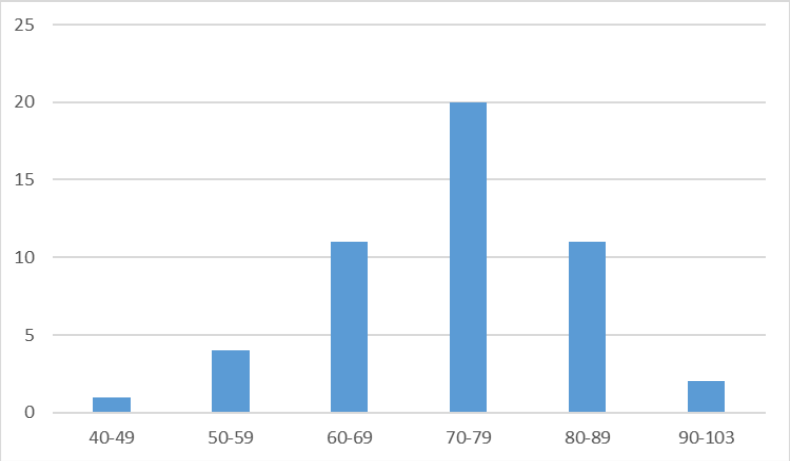


図1. 文章力養成講座登録者のPlacement Test得点分布図

表3と表4の比較から、両者の得点分布はほぼ一致しており、ある得点層の学生だけが講座を登録したり、またその逆に講座を登録しなかったりしたわけではないことが分かる。

更に、15 回の授業のうち、初回と最終回を除く 13 回において、『日本語検定 3 級公式練習問題集』を用いた小テストを実施した。表 5 はその結果である(10 回目は未受験のクラスがあるため除外する。)

表 5. 小テスト得点

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	12	13
満点	49	50	50	49	42	39	34	25	22	25	22	22
平均	36.3	34.3	36.5	36.4	15.7	14.9	22.4	25.6	25.5	20.4	17.3	17.5
%	82.6	77.9	83.0	82.8	82.7	82.9	89.5	85.3	79.7	97.3	82.5	79.5
標準偏差	10.7	4.8	6.4	6.6	6.6	2.8	3.9	2.6	5.2	3.7	2.9	4.5
人数	49	50	50	49	42	39	34	25	22	25	22	22

テキストの学習を学生の家庭学習に任せた試験であったが、学生は毎回80%程度の正解率を上げており、この得点状況から、学生は指示された家庭学習を行っていたことが推察される。

3.2 Achievement Test の結果に見る文章力養成講座の効果

前述のような授業や家庭学習を繰り返し行った効果を測る尺度として、前期の最終回に総まとめとしての Achievement Test を実施した。これは、Placement Test とは異なる問題だが、全国平均点から Placement Test と同程度と判断される日本語検定 3 級の過去問に倣ったものである。受験者は 28 名で平均点は 76.6 点(78.2%)であった。単位履修とはならない自由科目という本講座の特性と、時期的にも学期末であり正規の授業科目の試験がその前後に予定されていたことを考慮すると、Placement Test ほどの受験者数にはいたらなかった。しかし、このうち、21 名が Placement Test も受験していたため、Placement Test を Pretest、Achievement Test を Posttest とみなし、この両方の試験を受験した 21 名の得

点を比較することにした。

表6は両テストの統計量を示したものである。また、図2、図3はそれぞれ、Pretest、Posttestの得点分布を表したヒストグラムである。

表 6. Pretest と Posttest の統計量

	受験者数	平均値	標準偏差
Pretest	21	73.41	12.23
Posttest	21	78.57	7.80

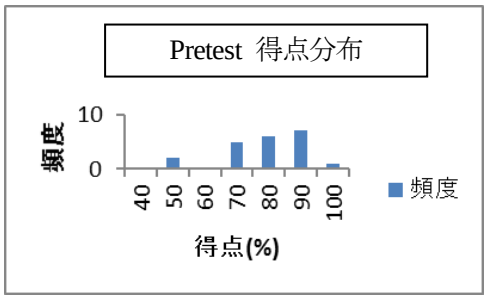


図 2.　Pretest の得点分布図

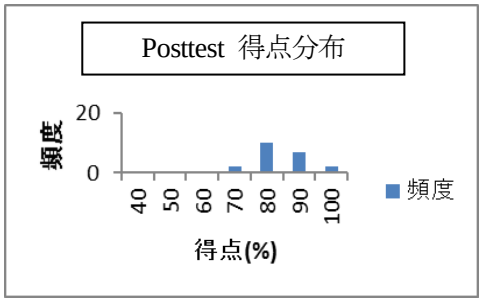


図 3.　Posttest の得点分布図

このグラフの比較からも Posttest における得点の上昇が視覚的に推測できるが、両テストにおける平均得点は Pretest が 73.41(%)、Posttest が 78.57(%)であった。そこで、この得点差を検証するために、ウィルコクソンの符号化順位検定を実施したところ、両得点に有意な差がみられた（Z =2.69, p<.01, r=.59)。

3.3 日本語検定に見る「文章力養成講座」の効果

前述のとおり「文章力養成講座」の目標の一つは、「（５）日本語検定により客観的な日本語力をはかる（まず３級、次に２級合格を目指す)」であった。平成 28 年度の「文章力養成講座」は夏季休暇中の特別講座、後期は前期同様、朝日新聞のインターネット教材「時事ワークシート」を活用したが、授業は新聞記事の読解、記述式問題の解答と添削など、表現力（すなわち文章力）を目指した内容とした。夏季講座と後期授業内容と小テストの得点状況などの報告は別の機会に譲るが、ここでは、平成 28 年度第 2 回（通算第 20 回）日本語検定の結果について簡潔に述べることにする。なお、日本語検定委員会の発表によると、第 20 回の総受検者数は 40,759 人、内、2 級が 4,231 人、3 級が 13,215 人であった。その認定率は、2 級 11.2%、準 2 級 23.5%、3 級 39.8%、準 3 級 30.0%となっている。また、受検生の中で大学・高等専門学校生が占める割合は 19.7%であった。

このような数値を前提に「文章力養成講座」受講生の受検結果を見てみることにする。受講生の内、延べ 22 名が申込み、うち 20 名が受検した[2]。内訳は以下の表 7 の通りである。

[2] 1 名が 2 級と 3 級の両方に申し込んでいたが、3 級のみを受検した。また、3 級に申し込んでいた 1 名が欠席であった。

表 7. 平成 28 年度第 2 回日本語検定の合否結果

受験級	人数	認定者数	準認定者数	不合格者数	認定率（準認定を含む総認定率）
2	3	0	1	2	0.0　(33.3)
3	17	12	4	1	70.6　(94.1)

注目に値するのは、Placement Test (Pretest)において低得点のため 3 級の合格圏内にいなかった学生が合格し、準認定の域にも達していなかった学生が準認定となっていることであり、夏季講座や後期の講座を通しての学習効果が出たものと見られる。また、合計得点は正規認定以上であるものの、大問別に設けられた基準点に一項目のみの得点が達していないために準認定となったものもいた。

次に、全国の大学・高等専門学校生の受検者の中で見た本研究の文章力養成講座受講生（以下、「受講生」と表記する。）の得点はどのような位置付けになっているのか、「団体カルテ」(日本語検定員会; 2016)を基に検討することにする。2 級は 1 名のみの準認定であったため、3 級に話を絞る。表 8 は 3 級の得点概要を示したものである。

表 8. 平成 28 年度第 2 回日本語検定 3 級の総合得点率

	受講生	大学•高等専門学校	全受検者
最高得点率	93.3%	95.5%	99.4%
最低得点率	62.0%	34.1%	0.0%
平均得点率	78.0%	73.2%	72.5%

表 8 から判断するに、最高得点率は更なる上昇の余地があるものの、最低得点率は大学・高等専門学校の全受検者と比較しても高い数値となっている。このことは、平均得点率からも受講生の受検生が全国の学生の受検生と比べても遜色がないことがわかる。

表 9 は試験内容を領域別にし、その得点率を示したものである。

表 9. 日本語検定 3 級の領域別得点率

	総合	敬語	文法	語彙	言葉の意味	表記	漢字
受講生平均	78.0%	81.8%	84.8%	77.6%	78.7%	71.3%	73.8%
大学•高等専門学校平均	73.2%	79.9%	82.4%	70.4%	71.7%	67.4%	70.3%
全受検者平均	72.5%	80.2%	81.2%	70.0%	72.1%	66.2%	68.9%

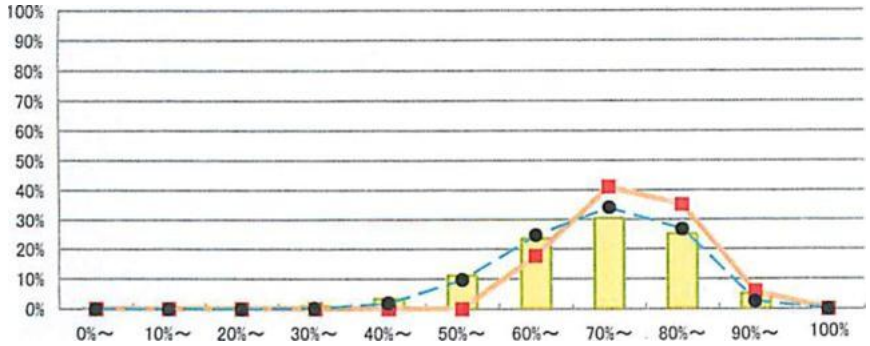
総合得点については、既に表 7 で示されているが、その内訳となる領域別のそれぞれにおいても受講生の受検生は全国の大学・高等専門学校の受検生の平均得点率を上回っていることが分かる。3.1 でも述べたように、ある得点層の学生だけが講座を登録したわけではなく、この結果についても受講生が文章力養成講座から各領域における基礎力の上昇という恩恵を得たことがうかがえる。

更に、表 10 は得点率の分布を比較したもので、そのグラフが図 4 である。図 4 からは受講生の得

点率分布が、全受検生や大学生・高等専門学校生の得点率分布より全体として高い得点側に位置していることが視覚的に見て取れる。

表 10. 平成 28 年度第 2 回日本語検定の得点率の分布

得点率	受講生	大学•高等専門字校	全受検者
0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
20-29%	0.0%	0.0%	0.2%
30-39%	0.0%	0.2%	1.0%
40-49%	0.0%	2.0%	3.4%
50-59%	17.6%	9.8%	11.2%
60-69%	17.6%	24.6%	23.5%
70-79%	41.2%	34.2%	30.4%
80-89%	35.3%	26.7%	25.0%
90-99%	5.9%	2.6%	5.1%
100%	0.0%	0.0%	0.0%



■: 受講生　●: 大学・高等専門学校学生受検生　棒グラフ：全受検生

図4. 平成28年度第2回日本語検定の得点率の分布図

「文章力養成講座」を受講していない学生の受検結果がないので、日本語検定の結果が一概に講座の効果であると言い切ることはできないが、PretestとPosttestの分析と日本語検定という客観試験においても一応の成績が残せたことを併せ考えると、「文章力養成講座」が受講生の日本語力向上に対して良い方向に働いているのではないかと考えられる。

4. 今後の展開

「文章力養成講座」が学生の日本語力向上にどのような効果をもたらしたか、客観的データを基に検討してきたが、惜しむらくはこの講座が単位認定とならない自由参加型の講座であるということである。そのため、いわゆる「やる気」のある学生、時間的にゆとりのある学生しか受講申し込みをし

なかったのが現状である。前述したように、日本語力の向上は、大学教育を円滑に行うために、あるいは学生の立場から見ると大学教育を享受するために、さらに多くの学生の受講が望まれるが、担当者から見ると、そのような日本語力の向上が最も必要な学生層が受講できていないのではないかという危惧がある。

本論の冒頭に述べたように、入学試験の多様化とともに、様々な基礎学力の学生が大学に入学している。「大学生と称するにははなはだ力不足だ」、「高校では何を習ってきたのか」などと述べてみたところで、問題の解決には至らない。大学に学生として入学させたからには、大学教育の質の保証という観点からも大学が責任をもって教育していくしか解決策はない。

今後展開していかなければならないことは、⑴全学部生の日本語力向上という意味で、より多くの学生が講座に参加できる体制を整えること、⑵講座の効果を測定する大学独自の客観テストを作成することである。⑴については、本論文執筆者の勤務大学では、2017 年度は社会福祉学部 1 年生全員について、キャリア形成という観点から、当講座を受講させることになった。その講座が現在進行中であり、年度末には講座の効果についても更なる詳細な報告ができるであろう。しかし、1 学部だけではなく、さらに進んで全学部の学生を対象とした、アメリカの大学教育における英語母国語話者を含めた全学部学生に課せられる English 101/102 の日本語版とでもいうべきこの種の講座の拡充を目指したい。より多くの学生が必須として受講できるようにするには、専門の垣根を超えた教員間の更なる協力が必要となるであろう。教員が多忙になっても、大学の現状を鑑みるに、大学としては当然の方向性である。⑵の理由について、すなわち、日本語検定をはじめとする各種外部試験がある中で、なぜ大学独自のテスト作成が必要なのかについて付け加えておく。確かにこれら外部試験は、学生が自らの実力を試し、また、卒業時点やその後のキャリアを追及するという意味で重要な位置を占めている。しかし、講座内で行う Pretest や Posttest など客観性が要求される尺度に毎回費用の生じる外部試験を使うわけにはいかない。効果的で「信頼性」と「妥当性」のある客観テストを大学が自ら作成し、適宜学生の日本語力を測る尺度として活用できるようにすることが必要である。この２点を今後の目標として掲げ、本論を閉じることにする。

最後に、ノンパラメットリック検定においては、関西福祉大学発達教育学部の大和田智文準教授のご助言を得たことを付記し、ここに謝意を表したい。

引用文献

石塚修 (2002).「大学生の国語力について考える」『筑波フォーラム』2002年1月号. Retrieved from http://www.u.tsukuba.ac.jp/~ishizuka.osamu.fu/kokugoryoku.html.

「今、大学生なんですけど国語の能力は中学生並みです。」(2016). Retrieved from http://lineq.jp/q/40577117.

上村和美 (2016).「『読解力診断テスト』の結果から見た学生の動向」『教育総合研究叢書』9号, 145-153.

小倉斉, 谷口純世, 中嶋真弓, 永井聖剛 (2016).「初年次教育・導入教育のためのテキスト『大学生のための読書案内—入門編—』政策に向けての共同研究(2013-2014)研究報告」『愛知淑得大学論集—文学部・文学研究科編』第41号,1-18.

小野雅裕 (2013).「『国語力』を磨けば、日本の理系は世界で勝てる：『舌先三寸』のアメリカ人に負け

て気づいたこと」, Retrieved from http://toyokeizai.net/articles/print/13376.
小野博, 村木英治, 林規生, 他 (2005).「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育 : IT活用学力支援研究」『NIME研究報告2005-6』 メディア教育開発センター 2005.
「研究や勉強ができないのは国語力不足が原因！？」(2013). Retrieved from http://blog.chase-dream.com/2013/01/19/3080.
「国語力のない大学生です」(2012). Retrieved from http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1380147103.
田中賢治, 近森節子, 徳永寿老, 山田晃 (2009).「大学初年次における「国語力育成プログラム」の開発 ー立命館大学経済学部を事例として」『大学行政研究』第 4 巻, 49-63. Retrieved from http://hdl.handle.net/10367/743.
戸田由美 (2016).「2016 年度教員採用試験 一般教養・国語を分析して：これからの時代に求められる教員の資質能力と「日本語力」」『教員採用試験で求められる「日本語力」』日本語検定委員会, 4-5.
仲正昌樹 (2016).「“文章力”幻想」『月刊・極北：名月堂書店ブログ』, Retrieved from http://meigetu.net/?p=4327.
西尾典洋, 矢島卓郎, 鈴木章生, 河野理恵, 上岡史郎, 大枝近子, 若井知草 (2016).「目白大学生における国語力向上を目指した日本語検定の活用」『目白大学 総合科学研究』12 号, 127-137.
日本語検定委員会(2016).「関西福祉大学・団体カルテ：語検 3 級」
野々村憲 (2008).「大学生の国語力に関する実態の分析と考察ー講義における検定試験運用の現状を通してー」『広島文化短期大学紀要』41 号, 145-150.
野々村憲 (2011).「大学生の国語力に関する実態の分析と考察（2）—日本漢字能力検定結果の分析データに基づく漢字能力の実態とその考察—」『広島文化学園大学学芸学部紀要』第 3 巻, 121-126.